



from Washington, D.C.



六月半ばに最盛期となった一七年ゼミの羽化の様子

## 結末が期待されるアメリカ

アメリカでの2021年の幕開けは、新大統領の下での新たな船出への期待に満ちていました。しかし、同年1月6日の議会襲撃事件で事態は一変。かねてより指摘されてきた社会の分断が浮き彫りとなった出来事でした。

そうした中、バイデン大統領は、就任演説において「UNITY (結末)」という言葉を実に8度も使い、「結末なしに平和は訪れない」と国民に呼び掛けました。

当地で暮らしていて、「UNITY」の芽生えを感じた出来事を紹介したいと思います。

7月4日の独立記念日には、各地で花火大会が催されるのが恒例です。今年は、大統領が「感染症からの独立」という面を強調したこともあり、街中で打ち上げられる花火を目当てに、多くの人が集まりました。家族、友人、また多様な人々が美しい花火を見上げ、和やかな雰囲気一色となりました。

夏に開催された東京オリンピック・パラリンピックでは、「Team USA」のスローガンのもと、大いに盛り上がりました（わが国の「ニッポン・チャ・チャ・チャ」と同じノリ）。アスリートたちが躍動する姿に

高揚する人々の様子から、スポーツを通じた「UNITY」を感じることができました。

盛り上がるという点では、今年はワシントン<sup>かいわい</sup>界隈で17年に一度大量発生する「17年ゼミ」もニュースとなりました。赤目のゼミが街中を覆いつくす光景は、ややグロテスクですが、同じ年に、一斉に地上に集結して種を残す知恵を目の当たりにして、畏敬の念と同時に、生物多様性をはじめとする多様性と、集うことの大切さを感じました。

年末にかけては、ハロウィン、クリスマスなど、家族や親しい友人と旧交を温める機会も増えます。新しい出会いもあったことでしょう。

バイデン大統領は、就任演説で「UNITY と言うと、一部の人にはばかげた幻想に聞こえることは分かっている」とも述べています。それでも多様性への寛容さや、社会のつながりに対する高い意識を保とうとするアメリカに、「UNITY」への期待は高まるばかりです。  
(日本銀行ワシントン事務所)

\*本コーナーは海外で働く日本銀行職員または日本銀行からの出向者が執筆しています。



議会襲撃直前の様子



いつも以上に熱のこもった、独立記念日の打ち上げ花火